

氏名	Boleat Christophe Alexandre
学位の種類	博士(社会デザイン学)
報告番号	甲第402号
学位授与年月日	2015年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	From Globalism To Localism : Observing Social Organization Changes in the Transition from Nation-size Societies to Local and Intentional Communities グローバリズムからローカリズムへ ～国家からローカルコミュニティーまでのトランジションにおけ る社会組織の変更を考える～
審査委員	(主査) 内山 節 CAPRIO, MARK E. 鬼頭 秀一(東京大学名誉教授、星槎大学共生科学部教授)

## I. 論文の構成と内容の要旨

### (1) 論文の構成

論文題目 : From Globalism To Localism

Observing Social Organization Changes in the Transition from  
Nation-size Societies to Local and International Communities

グローバリズムからローカリズムへ  
国家からローカルコミュニティまでのトランジションにおける社会組織の  
変更を考える

本論文は、本文（序章、第1章から終章まで）、謝辞、図表一覧、参考文献を含め、全304頁からなる。

本論文の構成は以下の通りである。

#### 第一部 グローバリズムとローカリズムの定義

##### 1.1 グローバリズムの定義 1.2 ローカリズムを定義

#### 第二部 政治

##### 2.1 帝国主義からグローバリズムまでにおける社会構造の変容

###### 2.1.1 ガルトゥングによる帝国主義論

###### 2.1.2 ウォーラーズタインによる「ワールド・システム」論

###### 2.1.3 ヒラー、モアとオゾンによるグローバリズムヘトランジション

##### 2.2 所有地とローカル社会デザイン

###### 2.2.1 フリオによる「使用所有地」と「もうけ所有地」の差異

###### 2.2.2 ローカルコミュニティのケーススタディ1 マリナレーダ

###### 2.2.3 ローカルコミュニティのケーススタディ2 フィンドホーン

###### 2.2.4 ローカルコミュニティのケーススタディ3 エマウス・レスカーポ

#### 第三部 経済

##### 3.1 国際金融市場における最高権威

3.1.1 世界経済借金と世界における金融機関の権威

3.1.2 連邦準備制度(F.R.S.)と貨幣の創設システム

3.2 ローカル貨幣システム

3.2.1 ローカル貨幣の実践

3.2.2 デジタル貨幣とその他の交換システム

3.2.3 ベーシックインカムにおける理論と実践

#### 第四部 宗教

4.1 グローバリズム、一神教と宗教的な間接者

4.1.1 センター化と宗教的な間接者の社会的役目

4.1.2 ヒラーによるノアヒズム

4.2 ローカルコミュニティにおける宗教と精神の社会的な役目

4.2.1 ローカル信仰とグローバル信仰

4.2.2 現在ローカル共同体におけるスピリチュアル活動と習慣

#### 第五部 防衛

5.1 グローバリズムによる防衛

5.1.1 世界資源を目的にしたグローバル軍隊競争

5.1.2 グローバリズムにおける防衛設備とフーコーによるバイオパワー

5.2 ローカリズムにおける防衛

5.2.1 サバイバル主義における防衛論

5.2.2 サン・ジョルジオによるS.A.B.(自主的で持続可能な住宅モデル)

5.2.3 ローカル防衛とコミュニティ・ネットワーク

#### 第六部 教育、メディアと文化

6.1 グローバリズムにおける教育、メディアと文化

- 6.1.1 情報とメディア管理のセンター化
- 6.1.2 クルスカールによるリベラル・リバータリアン論
- 6.1.3 情報におけるグローバル・ガバナンス
- 6.2 ローカリズムにおける教育、メディアと文化
  - 6.2.1 エコ意識の重要性
  - 6.2.2 パーマカルチャー
  - 6.2.3 教育を考え直す
  - 6.2.4 文化と伝統 第七部 結論

## 第七部 結論

- 7.1 グローバリズムとローカリズムにおける社会モデルの差異を纏める
- 7.2 グローバリズムの現代的な社会構造
- 7.3 グローバリズムの現代的な社会構造
- 7.4 グローバリズムとローカリズムにおける責任関係の構造
- 7.5 グローバリズムからローカリズムまでのトランジションは実現可能なのか
- 7.6 グローバル・ガバナンスVSオルタナティブなローカリスト型の政治システム

## 参考文献

## (2) 論文の内容要旨

今日の社会はグローバルな世界のなかに成立している。ところがこの世界は、経済、政治、環境などのさまざまな面で現代社会にひずみをもたらしている。本論文はこの現実を踏まえ、グローバリズムの本質とは何か、それはどのような構造をもち、いかなる成果と問題点をつくりだしているのかを主として社会学、政治社会学の視点から明らかにし、併せてその対極にある、世界各地で模索されているローカリズムの実験の意義と限界を考察することによって、グローバリズムとローカリズムという分析軸から現代世界の構造を解き明かそうとした研究である。申請者の視点は、世界性のうえに成立する権力はなぜ形成され、それはいかなる有効性と問題点をつくりだしていったのか、この権力性を消除することは可能なのか、その可能性をローカリズムはもっているのかを、権力構造と現代イデオロギーの結びつきを一体的に考察することによって解き明かそうとするものである。

本論文の第一部ではグローバリズムとローカリズムの概念を再定義し、第二部から第六部において、政治、経済、宗教、軍事、教育の分析をとおしてグローバリズムとローカリズムの構造を考察したうえで、第七部で全体の総括を試みるという構成となっている。そのことをとおしてグローバリズムからローカリズムへの社会の転換は可能かを申請者は問おうとした。

以下、各部に則して、内容、要旨を説明する。

### 第一部 グローバリズムとローカリズムの定義

現代社会はグローバルな世界のなかに成立している。このグローバリゼーションと今日のグローバリズムは性格が異なるというのが申請者の視点である。グローバリズムは世界性を土台として成立する権力と不可分なたちで生みだされた世界構造であり、ゆえにそれはグローバリズムというイデオロギーを内蔵している。

この世界構造に対して批判的な人々は、現在世界各地でインテンショナル・コミュニティ (intentional communities) をつくり、権力性を成立させないローカル世界を再創造しようとする実験をおこなっているが、権力の分散と意図的な弱体化は可能なのか。本論文では世界数カ所のインテンショナル・コミュニティの実践事例を、主として文献調査をとおして考察しているが、それもまた権力を発生させない社会創造というイデオロギーを内蔵している。とするとこのローカル・コミュニティをめざすイデオロギーは、どのように構造を成立させたとき実現可能なのか。第一部ではこのような問題意識を明確にしている。

### 第二部 政治

第二部ではグローバリズムとローカリズムを政治の視点から分析している。ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung)、イマヌエル・ウォーラーstein (Immanuel Wallerstein)、ピエール・ヒラー (Pierre Hillard)、マーク・モア (Mark Moore)、ローラン・オゾン (Laurent Ozon)、内山 節らの研究を検討しながら、政治権力の集中、中心への集中と、それがもたらす社会構造への影響を考察している。

政治権力の一点への集中は「中央」と「周辺」をつくりだし、それは国内的な「中央」と「周辺」だけではなく、世界的な「中央」と「周辺」を生みだし、さらに各国の「中央」が国境を越えて結びついていくことによって、世界性をもった権力が形成されていく。それはガルトゥングが1971年に「帝国主義」と定義づけた状態であり、ウォーラーsteinが「世界システム」と呼んだ概念の現代的構造

である。この構造のなかでヒラーが「グローバル・ハイパークラス」と定義づけた人々が形成され、このような国境を越えた権力の成立がグローバリズムの実態をつくりだすことになった。

このグローバリズムに対抗するイデオロギーを内蔵しながら、今日のインテンショナル・コミュニティは形成されているが、それらは自然との関係を重視し、権力の分散と政治システムを小規模化することによる意図的な権力の弱体化、「中央」を成立させない民主主義、エコロジー志向と自給自足型生活の重視などが共通する傾向として生まれている。

### 第三部 経済

第三部では、今日の経済が各国政府の統制を超えて展開するという世界性を確立し、それゆえに経済の部面では、各国の経済の合計が世界経済として機能するのではなく、国家から自由になった経済がみずからを経済権力として成立させている構造を考察し、ここにも世界性を土台にした権力が発生していることを明らかにしている。この構造はとりわけ金融において著しいが、この世界性をもった経済権力を自国の力として活用しようとする動きが、国際的な経済システムの主導権をとろうとする各国の動きとして展開している。こうして巨大な利益をもたらすグローバルな経済システムが生まれていくが、それは地域経済、地域で暮らす人々とともに展開してきた経済にとっては、壊滅的な影響をもたらすことになった。

ローカリズムはこのような経済のグローバリズムへの対抗イデオロギーを基盤にしている。ゆえに地域通貨を発行することによってオルタナティブな交換手段をつくり出そうとし、「協同作業場」では役職や地位に関係なく平等に収入を得るシステムの実験が進められている。経済においても「中央」をつくりださず、ローカル・コミュニティを基盤とした経済をネットワーク化するかたちで広がりをつくりだしていく試みがおこなわれている。

### 第四部 宗教

キリスト教やユダヤ教などの宗教は、現代における政治や経済組織と類似した構造をもっている。すなわち宗教のなかに「中央」と「周辺」が構造化され、宗教エリートに権力を集中させる、あるいは神と信者の関係のなかに宗教的権威によって成立する宗教的エリートを発生させ、宗教的権威に依存するがゆえに宗教的エリートもまた中央集権的な構造のなかに自己の存在を確立するかたちができあがった。

このような構造をもっているから、政治、経済、宗教は共通するシステムをもち、そのどれもがグローバリズムというイデオロギーを内蔵させている。それは世界性を土台にした権力であり、さまざまな「中央」の統合の上に成り立つ権力の世界性を保持しているのである。

かつてさまざまな地域の先住民たちも独自の宗教をもっていたように、ローカル・コミュニティにおいても宗教自体が否定される必要はない。実際インテンショナル・コミュニティのメンバーたちにも宗教的な意識をもっている人たちは数多く存在するが、課題は宗教の肯定か否定かではなく、権力やその基盤となる宗教的権威を発生させない信仰なのかどうかにある。そのような信仰が可能なら、信仰はローカル・コミュニティのバックボーンたり得ることもありうるし、信仰の存在がコミュニティ内部にヒエラルキーを発生させない要素として機能することもありうる。

### 第五部 防衛

第五部では「防衛」という行為が、グローバリズムとローカリズムにどのように影響を与えている

かを考察している。すなわち「防衛」が職業的な軍や警察という独特の社会階層によってになわれ、それゆえに人々が軍や警察に依存せざるを得ない状況の成立は、人間たちが大きなシステムに依存して生きる現代社会の構造と分かちがたく結びついている。自分たちの社会でありながら、その内部にいる人間たちは大きな政治システムや経済システム、宗教システム、「防衛」システムに依存して生きるかたちが定着し、そのことがこれらのシステムの権威を高め、権力性を確立していく基盤にもなっていった。

ローカル・コミュニティにおいても「防衛」は課題のひとつになっているが、ここでの「防衛」は自分たちのコミュニティを守る「防衛」であり、その内容は災害から自分たちを守ることや、災害からの復興を軸にしている。サバイバリスト・コミュニティはこの考えによってつくられており、「防衛」とは何か、「自衛」とは何かをローカリズムの視点から再検討することが必要であり、そのことをとおして現代のグローバリズムと不可分な関係にある「防衛」の問題点を明らかにしていく必要がある。

## 第六部 教育、メディアと文化

教育やメディア、文化の世界でも、同様のことが成立してきた。ここでも「中央」と「周辺」が形成され、「中央」はエリートたちによって担われるとともに、「中央」の権威化によってこのシステムが強化されるという構造が確立されてきたのである。それらが教育や意識の画一化をもたらし、人々の精神的発達に大きな影響を与えるようになった。このかたちを現代がつくりだしたひとつの思想として描いた人にミッシェル・クルサード (Michel Clouscard) がいたが、彼はそれを「進歩的自由主義者イデオロギー」と呼んでいる。

現在ローカリスト・ネットワークは、子供の教育に対する家庭やコミュニティの役割を再構築するオルタナティブな教育モデルや学校をつくり出している。ローカル・スクールでおこなわれている教育と情報と文化の協奏、エコロジー意識や地域文化・伝統などを重視しながら、人間と社会環境、自然環境との絆を取り戻そうとする試みを考察することによって、私たちは現代世界の教育やメディア、文化などのゆがみを再認識することができるのである。

## 第七部 結論

本論文でおこなってきた考察をまとめていくなら、グローバリズムは人間たちが生きていく根源的な基盤と人間との間に仲介エリートを存在させ、この仲介エリートによる仲介なしには人間たちは自分たちが生きる基盤にアクセスできない体制をつくりだした。この仲介エリートたちが支配するかたちで「中央」が形成され、しかもそれが世界性を基盤にした権力を醸成していくかたちで生まれてきたものがグローバリズムである。ゆえにそれはたえず解決のつかない問題を、政治的にも、経済的にも、環境的にもつくりだす。とともにこの構造をとらえていくためには、「グローバリズム研究」だけでは不十分であり、対抗イデオロギーとして生まれてきたローカリズムの考察をすることによって、グローバリズムの本質は明確になるといってもよい。

これからの時代は、ローカリズムとグローバリズムの衝突をいろいろなかたちで醸成していくことになるだろう。とともにその双方を考察することによって、私たちは現代世界を客観的に考察することができる。

## II. 論文審査結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は今日の世界をグローバリズムとローカリズムの対抗という視点から捉え、ローカリズムの考え方を考察することによってグローバリズムとは何かを明らかにする研究としてつくられている。すなわちグローバリズムとローカリズムというふたつのイデオロギーを、それぞれの本質を照射する鏡として用い、そのことによって現代世界の構造を分析している。

申請者が特に重視しているのは、現代的な権力とは何かの考察である。グローバリズムにおいては、権力は世界性という基盤のうえに成立し、ゆえに国境を越えたひとつのシステムとして形成されるというのが申請者の視点である。とともにこの世界性をもった権力を国家は取り込もうとし、そこに現代的なグローバル化された世界が形成されていく。

この構造のなかでたえず「中央」と「周辺」が形成され、「中央」の権威化とそれを担うエリートたちが発生していく。とともに人間たちがこの構造のなかに埋没してしまうがゆえに、グローバリズムは壊れることのないシステムとして機能しつづける。今日ではグローバリズムの政治、経済、環境などにおける問題点が認識されているにもかかわらず、グローバリズムが壊れることのない権力として機能しつづけることになってしまうのである。ゆえにグローバリズムの問題点を明らかにし、オルタナティブな道を発見するには、グローバリズムとは対極にあるローカリズムを分析することが不可欠だと申請者は考えている。この方法に基づいて世界の数カ所のインテンショナル・コミュニティが検討され、主としてフランスの現代社会学の成果を取り込みながら、現代世界の構造を明示したのが本論文である。

文献研究をもとにした理論研究であるが、独自の方法を駆使して現代世界の構造をグローバリズムとローカリズムという視点から明らかにした、これからの研究に多くの示唆を与える優れた研究として結実している。

### (2) 論文の評価

2015年1月16日の公開審査会後に開かれた第四回審査会においては、博士論文審査委員会は全員一致で本論文を合格とするという結論に達した。

本論文が評価されるべき点は以下の通りである。

第一に今日のグローバリズムの構造を、それへの対抗イデオロギーであるローカリズムの実践事例を分析することによって明らかにするという独自の方法が用いられており、そのことによってグローバリズムとは何かを客観的に明らかにすることに成功していることがあげられる。

第二に現代的な権力の構造を世界性と権威化されたシステム、このシステムを担う「仲介エリート」をキーワードとして分析することにより、新しい権力論を生み出す道筋が作りだされたことがあげられる。

第三に、本論文は、社会学、政治社会学、経済哲学、などを統合した研究であり、同時にこれからの社会デザイン学にとっても多くの示唆を与える優れた研究になっている。

審査委員からは申請者のこれからのより深い理論化や、本研究の方法を使ったより多くの事例研究などを期待する声もあったが、それらもまた、この方法でこれからの研究を深めていくことの意義を評価するが故のものであった。大きな課題に挑戦した研究であり、本研究がより完成されたものとしてつくられていくことへの期待は大きく、これからの社会デザイン学にとって有意義な成果が提示されているという意見が審査委員の共通する感想であった。

公開審査会における申請者の真摯な姿勢もふくめて、研究者としての今後の可能性を示す論文であり、審査委員会は本論文が博士（社会デザイン学）学位論文にふさわしいものであることを、一致して承認することとした。